

〔追悼の記〕

追悼 高見穎郎 先生

お茶の水女子大学 理学部

河村 哲也*

* E-mail for correspondence: kawamura@is.ocha.ac.jp

高見穎郎先生は2019年6月18日にご逝去されました。享年91歳でした。高見先生はここ数年、世間とお付き合いをほとんどなされておられなかったため、私が訃報を知ったのは、23日の朝でした。まだまだお元気だと思っただけに大変驚きました。

その少し後、ながれ編集委員長の後藤晋先生から[追悼の記]執筆の打診があり、少し困惑しました。といいますのは、高見先生とは大学院修士課程のとき研究室に入れていただき、その後、助手として数年間働かせていただいたのですが、大変迂闊な話ですが、肝心の高見先生のご経歴やご業績については、先生に直接伺ったこともなく、ほとんど知らなかったからです。その意味では桑原邦郎先生が最適なのですが、すでに故人であるため、頼むわけにもいきません。また、たとえご存命であっても桑原先生は、「河村君頼むよ」とおっしゃったに違いないので、執筆をお引き受けすることにいたしました。したがって、記述に正確でない部分があり、精密で信頼できる数値計算を目指された高見先生には大変失礼なことになりますが、やさしかった先生なので大目に見ただけだと思います。

前置きが長くなりましたが、高見先生のご経歴を簡単に記しますと1928年5月に東京都中野でお生まれになり、旧制東京高等学校から東大理学部物理学科に進まれ1952年にご卒業、同大学院を経て1957年東大理学部助手、1967年東大工学部助教授、1975年に同教授になられています。東大を定年退官されたあとは9年間神奈川大学理学部で教授（その後さらに5年間特任教授）を勤められました。なお、流体力学会への貢献も多大で、たとえば今井功先生が物理学会誌（50周年記念記事）に寄稿された文に「1958年1月に「流体力学懇談会」が発足し、筆者の研究室を事務局として機関紙「流力ニュース」が年4回発行されることになった。その中心になって活躍したのが高見穎郎君である。」とあります。また1986年には会長も務めておられます。

高見先生は、今井先生を一生の師として仰がれ、生涯敬愛の念をもって接してこられました。そして、そのことは高見先生と交わした会話でもしばしば今井先生が登場したことから、私にもわかりました。私にとって今井先生は雲の上の存在でしたが、高見先生を通して、身近に感じられるようになりました。今井先生が2004年10



今井功先生（右）とともに（1990年7月30日）

月に亡くなられてから、高見先生を中心に、追悼文集が企画され、1年半後に非売品の小冊子（といっても161ページ）として形になり、高見先生から私のところに送られてきました。その中で高見先生の書かれた文を読み返しているうちに高見先生の若いころのことが薄々ですがわかってきました。そこから引用させていただきますと「高等学校時代、私は理数系科目の教師になりたいと思い、基礎を学ぶために、1949年4月に東大理学部物理学科に入学した。今井先生の力学の講義を拝聴し、感動の余り、先生のあとを追いかけて行って、（後略）「大学院では、高速気流に関する研究テーマをいただいた。また、その後、助手にいただいたあとで、先生は私が物理教育に携わる場合に配慮されてのことであろう、高校物理の教科書編集の手伝いをさせてくださった。」

「高橋秀俊先生の研究室で、後藤英一さんが電子計算機PC1の発明をされたとき、今井先生もこれを大いに期待しておいでであった。流体運動の方程式を電子計算機で解くことを考えてみるようにと、勧めて下さった。先生は、信頼できる数値解を得ておくことの重要性を早くから感じておいでだった。」今井先生は、その後、私を米国に留学させてくださり、高精度の解を組織的に求めていく方法を検討する仕事に当たらせて下さった。」

高見先生は、川口光年先生が手回し計算機を1年半

回し続けて得られた円柱まわりの粘性流の数値解について、その高精度化を、New York 大学 Courant 研究所 (1964~1966 年滞在) において、IBM7094 と CDC6600 を用いて実行されました。このとき、遠方での境界条件を、今井先生によって研究された Navier-Stokes 方程式の解の無限遠での漸近的な性質に合わせるように設定されました。ただし、この境界条件には解が得られたとき初めて決まるパラメータ (抵抗係数) が含まれるため、数値的な取り扱いが単純ではありません。高見先生は同研究所において H. B. Keller 教授と P. D. Lax 教授に計算機使用の便宜のみならず、数値計算に対する教示も受け、また当時 Cornell 大学に来ておられた今井先生にも貴重な助言をいただいたと振り返っておられます。

高見先生は、その後、桑原先生と、渦糸近似法の研究をされたり、ダクト内に物体が置かれた場合の流れを、流れ関数-渦度法を用いて計算されたりしています。後者は、内部物体の表面上の流れ関数の値 (一定ですが、その一定値の決め方) が問題になります。さらに3次元流れの計算において、Navier-Stokes 方程式を Helmholtz 分解して解く方法も提案されています。

話は変わりますが、私が大学院進学するとき高見先生の研究室を選んだ理由は流体力学に対する興味よりは、大学3年生のとき受けた高見先生の数学の講義のわかりやすさが第一でした。その意味では、追いかけはしませんが、高見先生が今井研を選ばれたのと似ています。また私が京都の高校時代に丸善でカンパニエーツ理論物理学という本を目にして (もちろん読んでいません)、訳者が山内恭彦先生と高見先生であり、穎郎という名前をどう読むのだろうと気になっていました。そして、そのときから高見先生に親近感があったこともあります。高見研に入って早速聞いたところ「ひでお」と教えていただくとともに「穎」を「穎」とよく間違えられるとおっしゃっていました。

私が東大工学部物理工学科の学生だったころ、工学部教官紹介という冊子が学生に配られました。そこには工学部の各先生の略歴の他、1. 専門分野、2. モットー、3. 学生に対する言葉、4. 趣味が簡単に記されています。長い間本棚に眠っていたのですが、何十年かぶりに取り出して高見先生の欄を見たところ、「1. 非線形偏微分方程式の近似解法、流体力学の数理的な問題、2. 歩けよ歩け、3. 誠実であること。自分自身に対する要望でもある。4. 音楽、言語、古代史など。」とありました。

2. については、もちろん目標に向かって精進するという意味でしょうが、高見先生は健脚 (阿佐ヶ谷のご自宅から本郷まで歩かれたこともあるそうです) で、意外と文字通りだったのかも知れません。3. については、先生はとても誠実で紳士的であったのでご自分に対しては全くそのとおりでした。4. については、先生はバイ

オリンの名手でした。ロケット研究の糸川英夫先生がチェロを弾かれ、お2人で「オーケストラがやって来た」に出演されたことがあるそうです。そして、セミプロ楽団のウリタナル弦楽団 (弦楽器の裏板が鳴るといのが由来で雅楽のプロ奏者の方もメンバーでした) にも所属され、ピアノを弾いておられました。また、奥様も東京芸大を卒業されたピアニストです。

高見先生は言語に堪能で、前述のカンパニエーツは原著がロシア語ですし、ドイツ語やフランス語もマスターされていました。また、エスペラント語で書かれた論文もあります。高見先生と夏によく志賀高原に出かけたことがあります。ある日高見先生のお部屋にお邪魔したところ中国語の勉強をされていました。

1990年7月末に当時私の勤務先の鳥取大学で第8回西日本乱流シンポジウムが開催され、研究会にかこつけて高見先生と今井先生ご夫妻をご招待し、それが高見先生との忘れがたい思い出のひとつになっています。古代史が好きだと聞いていた両先生を、神話のふるさとの出雲空港まで車でお迎えし、出雲大社に詣で、皆生温泉に泊まり、風光明媚な大山や鳥取砂丘、山陰海岸などを案内しました。天気も大変よく両先生はとても楽しんでおられる様子でした。写真はそのとき大山寺において高見先生のカメラで私が撮ったもので、高見先生 (左) と今井先生が写っています。この写真は高見先生のご長男の朗様からご提供いただきました。なお、余談ですが高見先生は所用のため一足早く帰京され、今井先生は親戚がおられる兵庫県龍野で親族の集まりがあるとのことで1泊多く泊まりました。そして今井先生ご夫妻を龍野まで車でお送りしました。「河村君ちょっと寄っていきなさい」ということで、今井先生一族が集まれた会に少しだけお邪魔しました。今井先生の多くの錚々たる直弟子、孫弟子の中で、多数のご親族とお会いしたのは、不肖の孫弟子である私だけではないかと、この点だけは密かに誇りに思っています。

はじめに事務局から2ページというお約束でそんなに書けるかと思ったのですが、次々と思いがでてきて自分ながら閉口しつつ、このあたりで締めくくことにします。高見先生はさきほどの今井先生の追悼文集のなかで、「2003年5月に、先生は「新感覚物理学入門」を岩波書店からお出しになった。(中略)先生はこの本の中で、恐れ多くも、私を心友と呼んで下さった。(中略)常々心の底から敬愛してやまなかった師今井先生から、最後にこのように呼んでいただいただけでも、この世に生を受けた甲斐が十分にあったと感じている。」と書いていらっしゃいます。もしあの世があるとすれば、高見先生は今井先生と物理学談義に花を咲かせておられるのではないかと思います。高見先生のご冥福を心からお祈りいたします。